織物製成人女子・少女服製造業（不織布製及びレース製を含む）

服をつくる前に“人”を作る

7-12 株式会社　イワサキ

高級婦人服縫製のプロフェッショナル

株式会社イワサキは、約 60 年前に創業した高級婦人服縫製を中心に事業を展開している会社である。当時、日本には多数の縫製工場があった。だが、日本が高度成長期に入ると中国製などの安い縫製品に押され、日本の縫製工場は苦戦するようになった。

そのような状況の中でイワサキは、高級品にこだわり続けて安定した事業展開を行ってきた。「高級婦人服という領域は中国と競合しないため、受注が急激に減少することがない。」と岩崎会長は自信をのぞかせる。

作業に集中する社員たち

外部からもきちんと評価を受ける指標

岩崎会長は、「40 年前も今も、服を作る縫製という職業は給料も安く、条件も悪くて働く人々は苦労していた。どこの会社でもやっていけるような目で見て分かる資格を持っている、高い技能を持った人材を育成したかった。」と語る。そのため、約 40 年前に社内に職業訓練校を設置し、以後多数の社員を育成してきた。「服を作る前に人を作る。」という理念を基に、人材育成への投資を惜しみなく行ってきたのである。

職業訓練指導員以上の社員たち

婦人子供服製造技能検定の合格は、社員全員に義務として課されている。一部の社員は 1 級の技能検定に合格後、職業訓練指導員の資格を取得している。また、技能検定 1 級に合格した社員の中には、さらに上のレベルの技能取得を目指し、繊維製品品質管理士（TES）の資格試験を受験した社員もいる。このように、同社の社員たちは、技能検定合格後も職業訓練指導員や TES を目指すなど、公的資格の取得を段階的に行うことによって技能を磨いている。

確かな技能・技術を元に独立する女性も

同社では社員がある程度の技能・技術を身に付けるのに、約 4～5 年かかると見ている。1 級技能士となり、職業訓練士の資格を取った後に、同社で指導的な立場に立つ社員もいるが、独立する社員もいるという。

「独立した人の中には、イワサキでつちかった技術力を元に、デザインブランドを立ち上げたり、有名ブランド店の店長をしている人もいます。」と岩崎会長は卒業生の活躍をうれしそうに語ってくれた。

もちろん、経営者としては優秀な人材が辞めてしまうのは痛手だろう。それでも婦人服縫製の技術を持った女性たちが新しい道を切り開いていくその姿に頼もしさを感じているようだ。また、辞めてしまっても新しく高い技能・技術を持った人材を養成し続けており、これからも養成し続けるという“人”作りへの思いが感じられる。

職業訓練校と班での OJT による人材育成

イワサキの採用は、高校等の新卒採用のみである。新入社員は、1 年間無償で同社のビル内にある職業訓練校（夜間）で社長や外部講師等から基本を学ぶ。入社時は、業務を行う傍ら学校にも通うため極めて忙しい。卒業後、同社では技能検定の試験準備を学校の教室で自由に行うことができ、試験準備のための材料も自由に使える。

このように、惜しみなく人材育成に投資するが、社員は新卒のみの採用のため、辞めない社員を採用することが重要となる。そのため、学生には業務を 2 泊 3 日で体験してもらい、その後に入社を判断してもらうという。

実際の縫製業務では、4～5 人の班単位で同時に何着かの服を完成品まで製作している。班構成は 4～5 年目の社員を班長に、3 年生以下が班員として配置されている。この体制は効率的な縫製を行うとともに、若手社員に目標を持たせる効果がある。

株式会社　イワサキ

- 業種：織物製成人女子・少女服製造業（婦人服製造業）
- 住所：大阪府東大阪市
- 代表者：安達正敏
- 設立：昭和21年
- 従業員：89名
- 技能士：21名

技能士へのインタビュー

吉原　加奈氏（28 歳）　1 級婦人子供服製造技能士
堀谷　みよ氏（26 歳）　1 級婦人子供服製造技能士
塗木　智子氏（24 歳）　2 級婦人子供服製造技能士

デザイナーを志す前に実力をつけたくて

今回、お話を伺ったのは吉原氏、堀谷氏、塗木氏の 3 名である。にぎやかな雰囲気の中、イワサキへの入社理由を伺ってみると、短大の家政科出身の吉原氏は、「短大には服の仕事に携わりたくて進学したのですが、あまり技能を習得できませんでした。短大の専攻科に進学することも考えたのですが、職業訓練をしながら働けることが魅力で就職しました。実力をつけて、将来はデザイナーになりたいです。」と給料をもらいながら実力がつく、同社に魅力を感じたという。堀谷氏は、普通科高校の出身であるが、縫製の仕事がしたかったと同社の門をたたいたという。また、塗木氏は、高校の家政科出身で、県外にある会社に住み込み、かつ職業訓練もできるということが入社理由だったということである。3 人とも動機は異なるものの、イワサキの縫製業界における教育レベルの高さ、技術の確かさにひかれたようだ。

縫うのがただただ楽しくて

婦人服縫製における技能の魅力を尋ねてみると、「縫うのがただただ楽しいんです。」（塗木氏）という答えが返ってきた。彼女達は信じられないスピードで衣服を縫いあげており、工場は緊張した空気に包まれている。しかし、本人たちは、大変な部分があるものの、根っからの「お針子さん」で、自分のしている仕事を楽しいと感じているそうだ。

日本有数の技能を持つがゆえの悩み

イワサキでは、1 級の技能検定を受けるのが当たり前のように思われている。1 級技能検定は非常にレベルが高いので、普段の業務から技術や技能を意識して作業を行う人が多い。1 級技能士の吉原氏によると、「1 級技能検定を受ける人は、常日頃、意識して作業をしてるにしても、検定課題が分かってから、何着も練習をし、学科試験に関しても夜遅くまで勉強をしている。」という。また、検定に合格した技能士の中には、職業訓練指導員の免許を持つ社員も多い。高い技能を持ち他人を教えるだけの力量を持つ彼女達だが、実際に様々な個性を持った技能士達をまとめ上げ、生み出される衣服の品質を維持していくことは決して楽なことではないという。

例えば、吉原氏や堀谷氏は 1 級婦人子供服製造技能士、職業訓練指導員でもある。衣服の作り手としてベテランの域に達している上に、現場において班長として長い間活躍してきた。そこには高級品を生み出しているというやりがいと、それゆえの責任の大きさもあるのである。また、日本の厳しい経済状況下においては、個々人のキャリアステップについて悩むことも多いようだ。

「自分たちのキャリアステップを会社と一緒に考えていく必要があると思います。自分たちの働きが会社の今後にも、私達自身の将来にも大きく関わってきますし。」

例えば、吉原氏は短大時代に衣料管理士（TA：大学で繊維製品について素材や生産・流通・消費などの分野を、体系的に学んだ者に与えられる資格）を持っていた。そこで吉原氏は、衣料業界で今自分が関わっている縫製から、縫製される前段階である布、繊維の知識、もしくは縫製後の衣料品販売等の資格を取得し、現在の自分の業務と関連づけようと考えた。取材を実施した時点では、縫製の前段階の繊維関係の業務に強い、繊維製品品質管理士（TES：繊維製品の品質管理の業務に必要とされる基礎知識と応用能力を認定する資格）を受験したという。

決して安泰とは言えない市場の中にあって、イワサキの技能士は自分の技能を磨くことに対して非常に真剣である。そこには、自分の腕だけが自分の将来を決めていくという覚悟があり、そしてまた、女性の羨望の的となり、親が子供に是非とも着させたいと思う衣服を作っているということへの自負がある。イワサキで作られる衣服には、彼女達技能士の真摯な技が込められているのである。

吉原氏、堀谷氏、塗木氏